



道具よもやま話 ~收藏品紹介~

千代鶴太郎遺作 香憶

鍛冶の名工・千代鶴是秀には、二代目を継いだ太郎という実子がいた。昭和8年、太郎は27才という若さで自ら命を絶った。そのため、太郎やその作品には謎が多い。18才の頃から是秀の元で鍛冶修行に励んだ太郎は、既に処女作となる鉋刃^{はつちざり}「初契」(当館所蔵)を鍛え、「江戸熊」と呼ばれた名人工・加藤熊次郎に認められるほど早熟な技術習得を果たしていた。

その太郎が鍛えた「運寿」^{うんじゅ}銘の鉋が多く遺されている。太郎自身が作ったのは300枚程といわれ、是秀作の半値で売られたため、「半値で入手できる千代鶴鉋」としてよく売れた。実は太郎の没後も、是秀が「運寿」銘の鉋を作っている。是秀自身は追善供養として数十枚程度を作った。さらに、太郎没後に^{わくい}湧井商店がほかの鍛冶に代作させた鉋刃の一部を、焼入れしてまで是秀は制作を続けた。そして、その後も独占的販売権を持っていた湧井商店の采配で、「運寿」の制作が受け継がれた。そのため、ほかの

鍛冶による代作は多く目にするが、太郎自身や是秀による真作は稀である。

ところで当館の收藏品には、この「初契」と「運寿」のほか、「香憶」銘をもつ鉋がある。その背面には「太郎遺作」とあり、銘はいずれも是秀の手によって切られている。是秀と親しく、「運寿」銘の鉋を販売し続けた湧井商店が窮地に立たされた際、擁護にまわった道具屋仲間の幸田守親氏^{こうだもりちか}がながらく所有していたものである。しかし、どのような経緯でこの「香憶」銘の鉋が作られたのかは謎に包まれたままである。

「遺作」とあるが、太郎本人が自分で刻むものではない。太郎が失踪した際、仕事場には作りかけの鉋刃が20数枚残されていた。後継を失った落胆による1年間の休業状態の後に、是秀はそのほとんどを「運寿」として仕上げた。この「香憶」も、太郎の没後には是秀自ら仕上げたものではないだろうか。香る太郎の記憶。是秀の想いが宿る作品である。